



本録
義士銘々傳
全









事
士

大石主税良包

内藏之助良雄の息
男あり山科に於
間者を欺り
んため父が放
蕩多きお諫め
用井られざるに
因て坊腹せんと
良雄

碓貝十郎左門正久

弓術の名人あり始免京都愛宕山に
ありしを伯弼公見う家來とて風流の
人にて琴を好む夜討の時も琴爪を
懐中したりけれ
行年二十五才



心底を明し一味に加ふ
打入りの節非ず
働をなす行年

間喜兵衛光延

仇討の時ハ其年
巴に六十九才
ねども壯健
こと壯年の士も及ぶ
長刀鎧の極意を究め
討入の時ハ鎧を提げ五人
六人を對手に飛鳥の如く戦ひ
ハ見覚らし有様あり

不破数重正種

故あつて勘氣を蒙り他郷に浪々
ありけり義士等籠城と聞て其具を
携へ交むるに皆々と開城に決したる後ハ
良雄の同盟に加はり忠節のため死
名を留む行年三拾四才あり



原惣右衛門元辰

山鹿流の軍

学に達し能く其進退を
あは人の聞へを恐れ討入前ま
ハ至師に身をまじ
居たハ年五十二才
潮田又之丞高教
其先古田織部正の家臣潮田主水より出づ
和漢の書籍に亘り且フ
軍学を能くを夜討の時ハ繩梯子を屏に打ち掛り
真先に進み入りて働けり
行年三十五



前原伊助宗方

忠義金鉄の
若者
出立の幸
後之の文
妖へ使
に足る夜
如斯事
岡島八十右衛門常樹
武藝に長
あり銀
悪口
きく九
後菓子



行年二十九才

赤垣源藏正賢

力強く、柔力を好めり、大酒家
はく二三外、孫人多し、醉たる色
あし、夜討の時、最早、酒の香
仕舞ありと、凡そ五外、飲
心能く一睡し、大に、同士と、驚きりり

吉田忠左衛門兼光

相先、八下野、那須七
黨の内、より出づ、
学を好くせし、故
藩中に、門人多し
まき、経済に、造敷
嘗て、郡代を、勤むと、まき



堀部安兵衛武庸

越後大沢村の産、
の奥旨を極めたり、叔父の敵
を、江戸、高田の馬場、に討取り
文ねより、赤兵衛、金先の養子と
あり、父子共、義士の列に加り
大に、譽を、残せり、行年、三十四才

片岡源右衛門高房

赤波尾張守高房
の、末葉ありと、云
る、主君、功、腹の、物
目、通りを、願ひ、に
鮮血の、短刀を、授けり
赤穂城に、帰る、大石に、渡り、俱
に、復仇を、談せ、と、云、討入の時。



長 上

行年三十七才あり

七二

間瀬孫九郎正辰

法藏院流之鎗術は無邊に加之力も放
群はく日々角力あり大に
木を或は倒し或は顛がし果てし
去るうらに討入の勢は武勇を振ひく
戦ひけり

吉田澤右衛門兼貞

飛鳥を落し柳葉
を貫く手裏剣の名
人あり夜討ちの
砦も手裏を用ひて
目潰とあつた利腕
を打つて大に勝利
を得時に二十九才



富森助右衛門正岡

義心鉄筒の如く其健勝多しと驚くに
堪へず常に長刀を好んで妙を得
討入の時も推して表門より
進み大に奮り無て作詰と衆

茅野三平義利

流浪しく本國へ歸りし父。



之を歎ひ家に止め出ださ
ねバ突を告げり出でんと
せれども猶許されざるゆへ止を得
生害を大石感し茅野三平
討死と記しぬ行年二十九才あり

勝田新左門武亮

弓術に達したる人なき自ら
福蔵弓を以て人を撃つ
山野に獸獵を好し
又ハ鳥を射るは野
り多と云ふことか
し姪を高野の真へ
江少く音信を聞くの
便宜と云ふなり行年二十四才
六田五郎右衛門助武
村量衆に超へて殊に柔術の達人あり
播磨鹿野峠を通行せし時
手負猪に出遇ひて其猛勢故竹の如く
折るべしと見へざりしが大手を振り
之と取り組む力を以て遂に打殺せり行年二十九才



矢頭右衛門七教義

親長助重病と云
死にせしむるハ未だ
佐討のこと候知りず
と云へども大方之を察
し什代の境を出し右門七
は子へ汝十七才あれハ死父の
志を継ぎ必しも忠義を忘
るふと教訓するも右門七
行年十八才

菅野和助常成

忠義無二の勇士に討入の時
ハ一層目覚し奮を為し人々
を感ぜしむ大石が細藏の小刀の
句を見り常に之を愛敬せり年廿七
万山不重君命重一匙不輕我命輕



近松勘六行重

武術に秀ぎ強勇無双あり
加之仁慈の心深く甚三郎
其主恩を忘し難く夜討
の節主人に俱く屋敷
に入り小用杯を足せ
行重行年三十四才

小野寺孝左門秀當

小野寺十内秀知の
養子とあり十斗り
に未だ一度も主人に
面謁せざる内此妻あり
然れども養父と克く志を
合せ俱に義士の列に加ふ
行年二十八



間十次郎元興

忠義厚き人しく艱苦を事どもせし
吉良家の様子を探らんため非人の跡に
窺し徘徊あり行年二十五才
二流多しあといく路遠しまはる

中村勘助正辰

浪人しく後東都の
八丁堀に住し弓取
たきまし諸方
へ頼み遂に高家へ傳
手をもと免ぎ其様子を
探りける且大ニ棟梁
に深く交り屋敷繪図を取出
る大石へ送りけり行年四十五才



固堅金右門包秀

固野金右門の次男幼名を金三郎と

始先故ありて

花岳寺へ入れり僧と

あやしが兄早世に依て帰る家を次ぐ

俳諧を好んで討入の後も詠む年二十二

堀部弥兵衛金丸

左馬頭頼国の末孫あり武

藝に長けける中にも

尤も槍術を好む能く

大筒を討ち又槍術

をも能くせり仇討

の時手槍を提げ

働き壯者に異多しは行年七十八



間瀬久太夫政明

氣象勇猛は人々を脅と

せむ徒々傍若無人の如き振舞

このとき元離散の折一家

中各自離異を舟積りける折今

逆風を振ひたりし真田の荷を追ひ

送せし貝勇猛突に無類と云可

三村次郎左門包常

水練の名人に一とく克く数

一野の激流を渡ることを

得且ツ又水馬を使ふに妙

を得而恰も平地を行くが如

し故に上野の首を舟に送

るときは之れが故言備の為先付き

長上



村松喜兵衛秀直

判髪しとありけりも義士
籠城と聞く三六夫に
談し旅の用意を
し行程百七十余里
を僅り五日
馳せ来る大石其誠
忠を感し遂に
連判に如し 行年五十二才

小野寺十内秀知

小野十葎と改名し 医者と為り
高家へ便りし其動靜を
探り竟に本望を達しける因本出
立の砌り妻へ歌を使はせし其返歌ハ尤に
争ち勝らんた汰のよめれ来り言返すこと
行年六十一才



大石頼左門信清

半三の名人と
尤も矢つぎ早の
妙を得たり美
三三といふ三人一度に
放つ道及び
へり言入の筈半弓
を携えん家中の者を窘む行年二十七才

倉橋傳助武幸

浪々の後本所辺に住居し名を五
兵工と変じ兵服の荷を買ふ
吉良家の勝手へ立入り遂によき便
宜を得し諸士へ通じ夜討を定む
實に其孤忠称す可きなり 行年二十四才

二二

二二



義士

寺坂吉右衛門信行

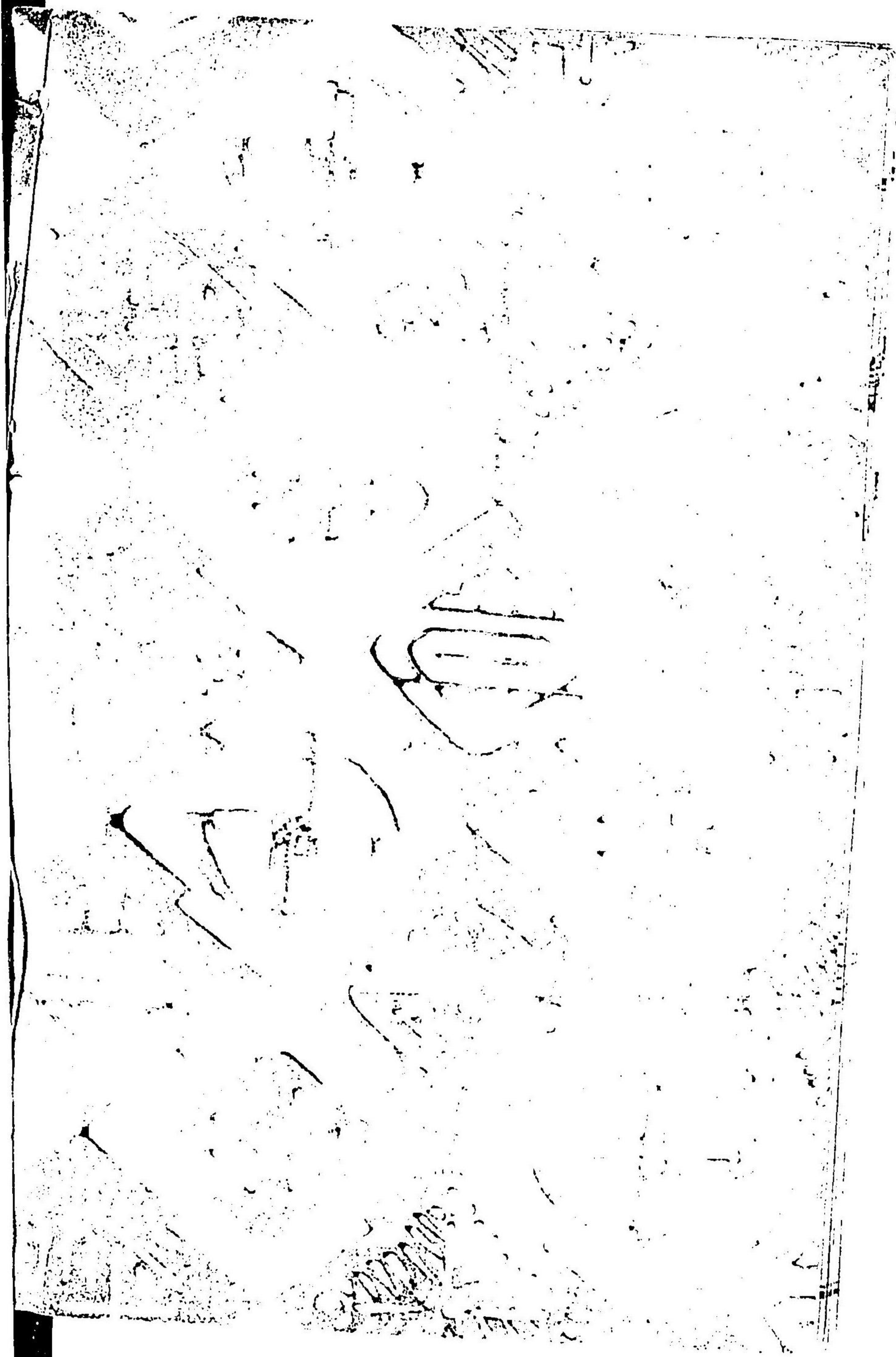
足輕の小頭ありと虽ども義心満腔に漲り彼の太堅九郎
兵工等に比せぬが実に月籠り音あり
ざるより復仇の後上方へ使
帰り来つゝ僧とあひま
河志
の跡
を
のふ



○行年
四十三才

明治二十三年六月 日印刷
全 年世月 日出版
東京本區横細町二丁目十八番地
著者印刷兼出版人

鎌田在明





特54
9

録義士銘々傳全

092412-000-9

特54-9

義士銘々伝

鎌田 在明 / 刊

M23

DBP-2025

